「古墳の発掘法及び作図法について」を読んで

佐久間　豊

雨宮龍太郎氏が，今回の論考を発表する上で大きな契機は昭和63年度の椎名崎古墳群調査にあったと思う。私は当時2班の班長をしており，このことについて，雨宮氏が班内会議でよく話題にしたことを強烈に覚えている。その際，雨宮氏がどのような調査をしているかを把握しないままに批判することは差し控えるべきと考え，かなりの回数にわたって現地に足を向けた記憶がある。雨宮氏からは，その度に熱心な説明を受け，その真摯な研究姿勢に深い感銘を受けている。

ところで，今回雨宮氏は自らの主張を開陳した訳であるが，私は古墳について詳しい知識がないため，墳丘の構造以降の内容については何ら批判する材料は持ち合わせていない。ただし，前半部については，現場での発掘調査方法に関わることであり，どうしても理解できなかった点も多くある。当時一緒に仕事をした人間の責務として，私なりの意見を述べるべきと考え，筆をとった次第である。現場で受けた印象を隠しながら表面的に批判することは，雨宮氏の真摯な態度に対して，かえって失礼であると考え，率直に意見を述べたい。

私の最大の疑問点は，墳丘上の土壙及び遺物埋納用のピットについてである。これらの覆土については，ベテランの補助員さんが，表土との違いが分からないとか壁が全く分からないといった愚痴をこぼしていたのを記憶している。たまたま，現場に行った折に観察すると，前者は私も同意見であった場合が多く，後者は私も壁を発見するのが困難なものがかなりあったのが事実である。特に，前者の遺構の一つからは，現代のものとしか考えられないスプーンが出土している。雨宮氏は文中で，墳丘上の土壙及び遺物埋納用ピットが容易に発見できない理由として，「……。さらには埋葬或は埋納後に掘り返した土をただちに埋めているので，遺構の覆土が周辺の封土と基本的に同じである」としている。古墳の封土はすべて同一ではなく，かなり土質の違う土を互層に突き固めて構築しているのではないか。そういった場所を掘り返して，直ちに埋め戻したとなれば，あまり咀嚼されず，黄色や黒色の大きなブロックが混ざり合い，かえって発見しやすいと言えるのではないか。また，土壙の長軸の長さは，私の記憶では150センチ以下のものが多く，埋葬方法はいかなるものか疑問に感じざるを得ない。たとえば，子供が中心に埋葬されたのか，はたまた大人なら座棺なのか。さらには，火葬なのか。

以上の点から，雨宮氏のいう墳丘上の土壙等のすべてが，古墳に関係する遺構とは考え難い。

次に古墳の原形の問題である。発掘調査は，まず表土を除去することから始まる。雨宮氏は，かなりこの段階の作業について，調査員の多くは手ぬるいと指摘されているが，例えば表土除去段階から移植で削っていくといった調査方法も採られており，この点での手抜りはあまり心配する必要がないのではなかろうか。第1図の堆積状況を観察すると，古墳の崩壊はいかなる時期に開始されるのか不明であるが，IIa層の堆積からして，中世末に至るまで数百年にわたって，雨宮氏のいう複雑な古墳形態が残存していたこととなる。認識の違いと言えばそれまでだが，気候条件等を考えると，私にはとても信じ難い。実験的に，雨宮氏のいう古墳原形と同じような小規模なマウンドを築造し，何年間か継続して観察してみることも一計である。

以上，まとまりなく，感じたままに記してしまったが，雨宮氏の言うとおり，行政調査は記録保存が多く，調査後壊されてしまう遺跡が大半である。しかも，費用・期間も限られる場合が多い。したがって，行政調査に携わる者は，許される費用・期間の中で調査対象遺跡の情報をどれだけ引き出せるかが問われるわけで，私達に課せられた最大の課題であるといえる。

なお，文末ではあるが，墳丘上の土壙等については，古墳時代か単なる近年の遺構かについてすでに峻別しているならば，ご容赦願うとともに，調査当時と考え方が変更となった根拠をお知らせ願いたい。　　（1991年4月27日稿了）